安芸高田市学校規模適正化委員会（第4回）議事録

平成21年9月24日（木）19:00～21:00

クリスタルアーヂュ 小ホール

【議事内容】

委員長

- 議論を円滑に進めるため、前回までの議論で2点確認をしておきたい。まず、一つは、本委員会では、安芸高田市の教育で望まれる適正な規模を検討する委員会であり、学校の配置は今後、別途検討するものであること。また、適正な規模を決めた上であっても、教育とは常に指導に尽力する必要がある、当面の対応として創意工夫を行っていかねなければならないことである。それでは、まず事務局から報告、資料説明をお願いしたい。

事務局 【2. 学校視察の資料説明】

委員長

- この資料に対してご質問はありますか。（意見無し）
- なければ続いての追加資料説明をお願いしたい。

コンサル【1. 追加資料（1）委員会での意見集約の資料説明】

委員長

- 何かご質問はございますか。

委員

- 意見の中に小規模校では不登校児童が多いという意見があったが、これに対して根拠はあるのか。ないのであれば意見として取り上げるのはいかがなものか。

事務局

- 委員会、学校視察での意見としてあげさせていただいている。

委員

- 以前の私が述べた意見であったと思うが。今急には事務局から提示された資料中のどこにあったか見つけ出せない、確か資料中に安芸高田市では不登校児童が多いというデータがあり、それに基づく意見として発言した。

委員長

- 小規模校では不登校児童が一人でもいればどうしても割合は非常に高くなる。そのための結果でもあり、不登校児童が多いという印象を持ったという意見であったと思う。
- 複式学級を含む小規模校の多い安芸高田市にとって、どのような教育を目指していくかを考えなければならない。
- それでは続いての追加資料説明を事務局からお願いしたい。

事務局【1. 追加資料（2）学校規模適正化関連等の答申状況の資料説明】

委員長

- ありがとうございます。何かご質問、ご意見があればお願いしたい。

委員

- 周辺自治体の同様の答申の比較表より、参考資料のない尾道市などでは、1 学級の人数として 20～30 名が適正であり、また 1 学年は複数学級が望まれるという結果になっている。こうした答申に対して、その理由はどのように述べられているのか。

事務局

- 参考資料として用意した 4 市町以外について答申そのものを参考資料にする了解は得ていない。現在配布しているものが全てである。

委員

- 資料はださないという意味か。それとも用意できていないということか。次回でもよいのであるが。

事務局

- 再度部分的にでも、出ていない市町の答申そのものを、資料として配布してよいか了解を伺うが、本市の答申ではないので次回資料となるかは約束できない。

委員長

- 北広島町などではクラス換えが可能なことが重視されている。例えばクラス換えを可能にする人数を適正規模と考えるとしても、安芸高田市の現状と比べて、目指すべき教育とそれを実施する際の問題点があると思われる。
- それでは残された時間で、こうした報告を踏まえて、安芸高田市の目指していく教育、そのための適正な規模についての議論を進めていきたい。

委員

- 9 月 14 日の視察に参加させていただいた。その際、校長先生から 1 クラスの人数の根拠として 20～30 名と申された。聞けば体育の授業でのチームゲームでは人数がいらないと実施できず、1 学級 20 名以上いれば 1 学級でもチームゲームができるという点では小規模のクラスには不安は感じるとのことであった。

委員長

- 学校規模という話と、学級規模という話があり、今の意見は学級規模についての意見である。その他のご意見はいかがか。

委員

- 1 学級 20～30 名が適切ではないかと考える。私の子どもは小 1 であり、1 学級 12 名であるが、視察でも感じたが小規模では先生の目が行き届く。前回の会議でも、先生のご意見で 25 名以上の学級の場合は常に目を配り、関わられたかどうかについては不安が残るとのご意見であった。視察では小規模校の代表として川根小学校の授業を拝見させていただいたが、複式学級ではない小規模校の現状も見ておく必要があるのではないと思う。

副委員長

- 安芸高田市は平成 16 年 3 月に合併したのであるが、これまで旧 6 町ではそれぞれ、特色のある施策を行ってきている。向原町であれば、上下水道整備、ほ場整備などがあげられる。教育面では向原町には小学校 1 校、中学校 1 校であるが、一方学力向上フロンティア事業として、学習技術の向上をめざしてきた。今でも旧 6 町単位の教育を引き継ぎ、特色のある教育を行ってきている。こうした特色ある教育を活かしながらも、ふる

さが向原町などの旧町ではなく、安芸高田市だと感じられるような新しい視点から再度考えていくということはどうだろうか。

委員

- 過去3回の委員会で大きな流れとして、小規模校でいいじゃないかという意見が主流であったように感じている。中学校の校長の立場から言えば、その後の生徒の進路についてが気にかかる。正確なデータはないが、進路指導をしていて、ここ5、6年、中学を卒業した生徒が安芸高田市の高校に進む割合が減少し、約50%は市外の高校に進んでいると思う。その理由としてもう少し大きな規模の学校で切磋琢磨し、自分の力を伸ばしたいという意見をよく聞く。安芸高田市内の高校に進めば通学費も安いと思うが、そうではない。こうした現状から小・中学校ではもう少し大きな適正な規模で学習環境を整備してあげれば、市内の学校への進学率も高まり、地域にも活力が生まれるのではないかと率直に思う。将来の子どもたちのために積極的に議論して適正な規模についてまとめていくことが必要であろう。

委員

- 私は甲立小学校にでかけることがよくある。甲立では1~3年は各学年12名ずつであり、それから考えれば美土里小学校などは各学年とも望まれるような人数に思える。美土里地区では平成14年4月に4校を合併させた経緯がある。美土里地区の委員の方に統合の経過や統合によるメリットなどについてお話いただければ参考になるのではないかと思います。

委員

- 経緯としては美土里地区には4校あり、北小学校、生桑小学校、本郷小学校、横田小学校の中で横田小以外は複式学級であった。教育委員会では14年前に統合の話が持ち上がり、地域住民に話が下りてきたのは11年前である。実は私も統合には反対であり、地域の文化センターである学校が閉鎖されると猛反対した。しかし、町民へのアンケート結果では、子を持つ親の意見として合併・統合したほうがよいという意見が多かった。結果として1校だけは統合しないということで3校統合ということに話は進んだが、当該1校の子どもだけが残る形になり、かわいそうであるという意見から4校が統合となった。私は北小の出身で住んでいるのも学校周辺である。北小の統合には反対であったがその後をみると統合したほうが、活気が出て良かったと思う、保護者からも統合して良かったという意見を聞いた。市教委で子どもたちが統合をどのように捕らえるか、小学校の中学年以上の意見を参考にされることもよいのではないかと。

委員

- 私の子は現在美土里小の3年生で1クラス26名の規模である、子どもたちに直接尋ねると統合していろんな友達ができよかったと聞く。また、保育所の面から考えても、保育所は現在2地区7名ずつの子がおり、統合してよかったと思う。早い段階でいろいろな地域の方に接することは望ましく、保護者としてもいろいろな悩みや考え方があることを知り、多くの方と接することで、共感できる環境も広がりがりここに住み続けたいと思う動機となっている。またいろいろな考え方があり保護者の定住への思いは子どもたちにも伝わる。外から転入してくると最初は地域に入りきれない。地域では統合により小学校が廃校となり寂しくはなったが、地域に子どもがいなくなったわけではなく、

子どもたちはより地域との交流、行事を大切にできるようになったと感じる。美土里地区の統合は結果としてよかったと思う。

委員長

- 美土里小は1クラス20～30名の事例である。また1クラス25、6名の学級がよいのではないかという意見が続いていて大半となってきているが、他のご意見はないか。

委員

- これまでの視察で吉田小、川根小を見てきた。私の子どもは現在1クラス15名であるが、吉田小の授業では果たして全員が理解しているのかという点に疑問を持った。現在の15名規模でも指導はしっかりしており、川根小の授業を見て、うちの子にも見せてやりたいほど、児童の自主学習などのしっかりした姿を見た。このため、児童数は少なければ少ないほどよいのではないかとも思った。

委員

- 正直、視察など参加し、自分の中では適正規模についての結論がわからなくなってきた。規模の大きな学校では活気がある、一方で小規模校でも授業に創意工夫が見られる。人数的にどれ位がいいのかはわからない。吉田小や川根小では各地区で特色のある教育を行っている。どこも地域性があり良い教育だと思う。

委員長

- 子どもたちの日常の教育に対しては、教師の指導力等、いろいろな要因が関係してくる。7月の学校視察の際にも述べたが、あくまで1時点を切り取って視察したものである。教育では一方的な授業では子どもの力がつかない。複式学級ではいやおうなしに自主的な力が身につく環境にある。その他のご意見はいかがか。

委員

- 校長会の代表として出席させてもらっている。校長会の意見を踏まえると、小学校、中学校ともどこの校長も自分の学校が最もよいと思っている。だが、各意見は置いておいて理想から言えば学級は複数、組換えができることが望まれる。1学年複数学級であれば41名の学級は20名と21名にわけることとなる。前回1クラス30名以下と述べたのはこうしたことからの意見である。

委員

- 先日、市長と話をする機会があり、様々なことを話した。教育についてもスクールバスの運行も含めた学校の統廃合の話などもした。市長の話では統廃合が前面に出ていた。更に、各委員さんの話を聞き、ますますわからなくなってきた。行政・教育委員会での本音としてはどのようにお考えか。

事務局

- 1クラスあたりの児童・生徒数、1学年あたりの学級数について、本委員会からの答申をうけたいと思う、その後学校配置については別途実施計画を策定し、地域の方とも話し合いながら進めるものである。本委員会ではあくまでも安芸高田市の教育にとっての理想としての数をお示しいただきたい。

委員

- 理想の数に基づいて配置を決めるのは実施計画時の行政ということでは、統合ありきのような気がする。

委員長

- 理想の数が決まっても、実際には旧6町の現実があり、条件の下で数の増減については考えていかなければならない。行政も地域での様々な条件を踏まえながら適正配置については進めるものであり、本委員会の答申を下に統廃合を進めることはできない。

委員

- 規模と配置を2段階で考えていくとおっしゃられたが、私は一体として考えなければならぬと思う。それよりも前に、そもそも適正化について、この委員だけで決めて良いものか。子ども自身が喜ぶものをどのように考えるか、それについて大人が手順を決めてよいものなのか、例えば以前も述べたが、子どもに対してアンケートを採る等をしたほうがよいのではないか。

委員長

- 大人が責任を持って決めるべきではないか。責任を放棄すべきでない。

委員

- 現実を見ながら進めるべきではないかということである。子どもの意見をしっかり踏まえることも必要である。

委員

- 9月14日、15日の学校視察には参加できなかったが、今の現状を無理に守ろうとする意見ではない。ただ旧高宮町の文化は続いており地域の振興に地域振興会も担ってきた経緯がある。合併での影響として、町役場がなくなったわけではないが、職員数は少なくなり、生活での不安が募る。川根地域には23戸の町営住宅があり、2/3は域外からの転入者が居住しており、昨年も7名の子どもが生まれ地域の皆が元気をもらった。統合ありきの議論ではなく、配置のことは抜きで規模について判断することが求められており、各地域の特色ある教育を踏まえて、安芸高田市ではこうした教育を行う、まかせてくれといった行政の意気込みを見せてもらえればなにも問題はないと思う。また実際の配置を考える際には5名、10名の学級があってもよいではないかと思う。

委員長

- 各地域の現状はまず肯定される。規模を大きくすれば活気が出てくるのは認められるところであり、2段階としてまず、適正規模についての方向性を考え、現実の中で調整が行われるための資料となる必要がある。適正規模を考えていくためには、各地域で工夫が必要であり、統廃合については適正配置で考えるということであり、今求められている視点は1クラスの人数、1学年のクラス数といった規模である。
- 視点は異なるが、1クラス20～30名の学級、1学年複数学級といった規模でなくてもこうした支援があれば安芸高田市の教育は実現できるという支援策、留意点についてもまとめていければと思う。適正規模とそこまでの創意工夫という両論併記での答申になればと思われる。

委員

- 17、18年前に川根中でも統合の答申があり学校統合となったが、子どもたちにとっては、中学になれば部活があり、朝練や練習の延長により、スクールバスだけでは生徒の通学に対応できなくなっている。このため、スクールバスについて結果的に今後、地域の「もやい民」が車の横にステッカーを貼り、運営していく。これも時代の流れである。

教育内容は教育委員会や学校が行うが、地域の実情に合わせ、場合によっては統合も踏まえて自分たちができることを探していかなければならないと思う。

委員

- 学校教育で何を目標にしていくかは、以前にも配られた学校教育法に明記してある。その中で書かれている教育環境を実現できないようであれば学校は成立しない。目標を満たしていれば、社会性を踏まえて2クラスにするとかクラブ活動に応じて支援を行うとか、そういったことまでは法律には明記されていない。このため答申では主従関係となるような表記はさけるべきである。また、20～30名のクラスがよいという意見はあるが本委員会の大勢とはいきれない。結果地域の自主的な判断にゆだねることが得策ではないか。

委員長

- 適正な規模を打ち出しても、地域での実現には多くの他の条件が絡んでくる。原案を事務局に示してもらい、進めていくことが望ましいと思われる。

委員

- 第1回委員会からの話であるが、理想について言い出したらきりがない。この机がここで用いられているのも商品として最高であるからではなく、価格を踏まえて需要と供給がマッチしたため、ここにある。理想ではゴールが見えてこないと思われるため、逆にこれはほしくないほうがよいという最低限の点について議論することのほうがよいと思われる。

委員長

- 私も当初委員長を引き受ける時に確認したが、基準に無理があれば現実に実施することも無理である。適正規模を考え、その後の1つの方策としては統合もありうる。答申での適正規模は理想に近づける指標になればよいと思われる。

委員

- 吉田小学校と川根小学校では同じ箱には収まらないと思う。理想の押しつけになりはしないか。

委員長

- 安芸高田市の目指すべき教育とは何か。その実現のためにはどのような規模が適正と考えられるか。その規模の実現には旧6町の特色ある教育を踏まえて考えていく必要がある、スケジュールから考えても、まずは事務局の案を基に考えていくことが適切かと思われる。

委員

- 先ほど委員と市長との話も出てきている。行政サイドが考えておられるストーリーはどのようなものか。

事務局

- 市としては合併し、200億円程度の予算の中、教育に割ける予算は15億円程度である。その中で安芸高田市では、学級補助員を全小学校に配置し、また特別な支援が必要な子供たちへの教育介助員の設置、さらに英語教育についてはALTを5名配置してきている。こうした状況でも分かる通り教育には力を入れている。適正な規模を本委員会から答申いただきたい。現状の投資で新たな教育をどのようにカバーしていくか、地域の特色あ

る教育をどのように踏襲するかということは、市長の思いでもあり、本委員会に答申を願っている。例えば1クラス20～30名という答申を受けても、それをもって直ちに地域の経過を無視して実施する動きはありえない。まずは第1段階としてどのような規模が望まれるかというための委員会である。

委員

- 例えば1クラス20～30名として40名の学級ではどのように対応するのか

委員長

- チームティーチングの取り入れ等、実施計画策定時に考えていくという方向がある。こうした留意点を含めて、答申をしていただきたい。
- それでは定刻となったため今回の委員会はこれで終了する。次回開催日程についてはいかがか。木曜日の開催と考えると10月15日の日程となるがよろしいか。

事務局

- 次回委員会は、10月15日（木）の19時からで調整させていただきたいと思います、また日程は別途通知いたします。本日はありがとうございました。

以上